ISSN 0385-9487

東洋學論叢

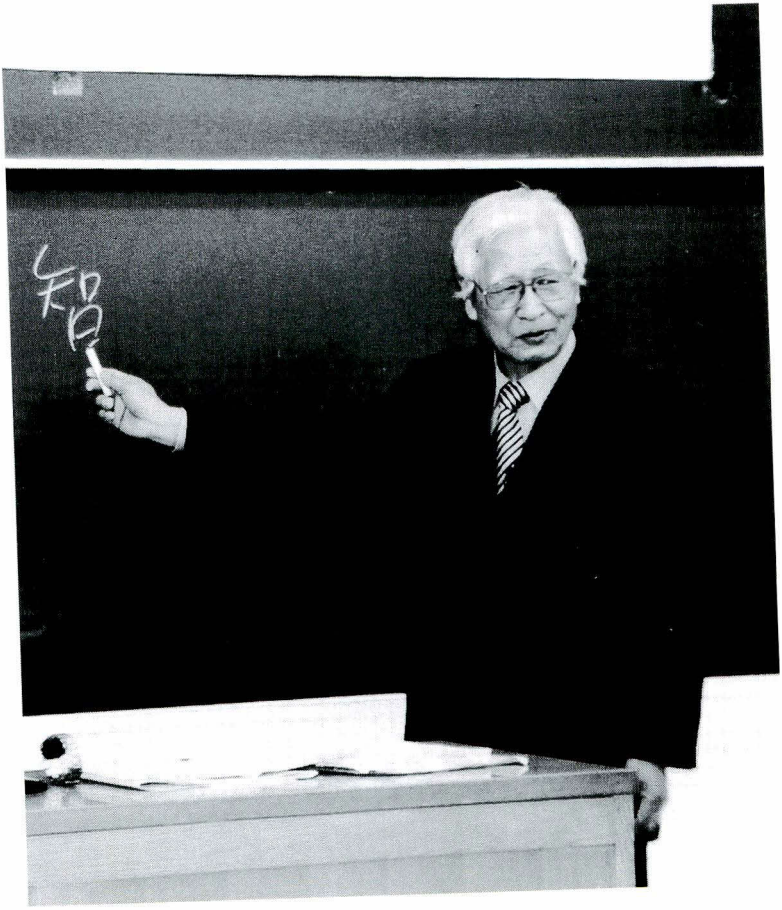
菅沼 晃 教授退任記念号

私の研究と東洋大学　菅沼　晃　(20)
道元における禅的実存の理路　竹村　牧男　(39)
カビール『ビージャク』和訳余滴(3)—カヘラ—　橋本　泰元　(97)
Manusmṛti 王権論における第8、9章の意義(下)　沼田　一郎　(105)
『續高僧傳』に見る達磨系習禪者の諸相
—道宣の認識の變化が意味するもの—　伊吹　敦　(136)
仏典はどのように漢訳されたのか
—笈多訳『金剛能断般若波羅蜜経』を巡って—　渡辺　章悟　(157)
死語・輪廻はあるか
—「無記」「十二縁起」「無我」の再考—　森　章司　(180)

東洋大学文学部紀要第58集

インド哲学科篇

XXX



菅沼 晃 教授 最終講義にて

菅沼　晃　教授　略歴・業績目録

略歴

昭和　九年　四月五日　群馬県富岡市星田、臨済宗妙心寺派末寺の長男として生まれる
昭和二八年　三月　群馬県立富岡高等学校卒業
昭和二八年　四月　東洋大学文学部仏教学科入学
昭和三二年　三月　東洋大学文学部仏教学科卒業
昭和三二年　四月　東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻修士課程入学
昭和三四年　三月　東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻修士課程修了（文学修士）
昭和三四年　四月　東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻博士課程入学
昭和三七年　三月　東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻博士課程修了
昭和三七年　四月　東洋大学文学部助手兼講師
昭和三七年　七月　東洋学研究所研究員
昭和四〇年　四月　東洋大学文学部専任講師兼助手
昭和四一年　四月　大東文化大学非常勤講師（昭和四九年三月まで）
昭和四二年　四月　東洋大学文学部専任講師

昭和四三年　四月　東洋大学文学部助教授
昭和四三年　四月　東洋学研究所研究所員
昭和四七年　四月　東洋大学文学部第二部仏教学科主任
昭和四八年　四月　東洋大学文学部第一部仏教学科主任
昭和五〇年　四月　東洋大学文学部教授
昭和五〇年　四月　東洋大学文学部第二部仏教学科主任
昭和五〇年　五月　「入楞伽経の思想史的研究」にて文学博士
昭和五一年　四月　東洋大学文学部第二部仏教学科主任
昭和五一年　四月　東洋学研究所所長代行（昭和五一年一二月まで）
昭和五二年　四月　東洋大学文学部長（第二部仏教学科主任兼務）
昭和五二月　四月　学校法人東洋大学評議員
昭和五二年　四月　東京外国語大学外国語学部（モンゴル語学科）非常勤講師（昭和六三年三月まで）
昭和五二年　四月　東洋大学短期大学非常勤講師（前期）
昭和五四年　四月　東洋大学文学部長（再任）（第二部印度哲学科主任兼任）
昭和五四年　九月　学校法人東洋大学理事（昭和五七年一二月まで）
昭和五五年　一月　東洋大学創立百周年記念事業委員会委員
昭和五五年　五月　東洋大学研究・教育学習長期実行計画委員会委員
昭和五七年　四月　東洋大学文学部第二部印度哲学科主任（昭和五八年三月まで）

昭和五九年　四月　東洋大学文学部第一部印度哲学科主任（昭和六一年三月まで）
昭和五九年　四月　教職課程運営委員会委員長
昭和六一年　四月　教職課程運営委員会委員長再任（昭和六三年三月まで）
昭和六一年　四月　東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻主任（平成二年三月まで）
昭和六一年一一月　東洋大学アイデンティティ委員会大学理念小委員会委員
昭和六二年　四月　教学審議会委員
平成　元年　七月　東洋大学フォーラム編集委員会委員
平成　二年　四月　東洋大学大学院文学研究科委員長（平成三年九月まで）
平成　三年　九月　東洋大学学長（平成六年九月まで）
平成　三年　九月　学校法人東洋大学理事（平成六年九月まで）
平成　四年　四月　東洋大学短期大学学長（平成六年九月まで）
平成　五年　四月　学校法人京北学園理事（平成六年九月まで）
平成　八年　四月　平成八年度国内特別研究員
平成　八年　六月　ソヨルーエルデム大学（文化教育大学、モンゴル国ウランバートル市）客員特別名誉教授
平成　九年　一月　学術審議会専門委員（科学研究費分科会）
平成　九年　八月　内蒙古民族専科学校客座教授
平成一二年一二月　学校法人東洋大学評議員（平成一五年一二月まで）
平成一七年　三月　東洋大学文学部を定年退職

現在

東洋大学校友会会長

大法輪石原育英会理事

庭野平和財団評議員

日曜講義（社会人対象）主宰

著書・編著・共著

『ヒンドゥー教―その現象と思想―』（評論社、昭和五一年五月）

『道元辞典』（東京堂出版、昭和五二年十一月）

『砂漠と幻想の国・アフガンニスタンの仏教』（共著、佼成出版社、昭和五二年十一月）

『サンスクリットの基礎と実践』（平河出版社、昭和五五年五月）

『仏教文学辞典』（共著、東京堂出版、昭和五五年六月）

『釈迦のことば』（雄山閣、昭和五七年一月）

『インド神話伝説辞典』（東京堂出版社、昭和六十年三月）

『栄西・白隠のことば』（雄山閣出版、昭和六一年八月）

『釈迦のことば』（雄山閣出版、昭和六一年十月）

『サンスクリット講読・インド思想編』（平河出版社、昭和六一年十一月）

『ブッダとその弟子・八九の物語』（法蔵館、平成二年三月）

『仏教の受容と変容』インド篇（佼成出版社、平成三年十月）
『サンスクリットの基礎（上）』（平河出版社、平成六年八月）
『増補改訂・サンスクリット講読・インド思想編』（平河出版社、平成八年六月）
『維摩経をよむ　上』（ＮＨＫ出版、平成九年四月）
『維摩経をよむ　下』（ＮＨＫ出版、平成九年十月）
『新・サンスクリットの基礎　下』（平河出版社、平成九年十二月）
『維摩経をよむ』（ＮＨＫライブラリー十二、ＮＨＫ出版、平成十一年六月）
『ブッダの悟り三三物語』（法蔵館、平成十一年十二月）
『維摩居士の生き方に学ぶ』（第三五八回　一隅会速記録　㈳日本能率協会　平成十三年三月）
『釈迦の説話に耳を澄ましてみませんか』（河出書房新社　平成十五年二月）
『ドラマ維摩経　全三幕』（佼成出版社　平成十六年五月）
『モンゴル仏教紀行』（春秋社　平成十六年七月）

分担執筆

「原始仏教と部派仏教」『アジア仏教史』インド篇Ⅱ（佼成出版社、昭和四九年三月）
「真理とことば」『別巻密教講座』第四号（昭和五十年三月）
「智と愛と行為―般若・空の世界―」『別巻密教講座』第六巻（昭和五一年四月）
「栄西」『日本仏教の宗祖』（東京堂出版社、昭和五二年十一月）

「部派の成立」（『根本仏教』佼成出版社、昭和五二年十一月）
「鎌倉期の新仏教」（『世界の宗教と経典』、昭和五四年二月）
「西・中央アジアの大乗仏教」（『大乗仏教〈歴史編〉』、佼成出版社、昭和五十年四月）
「仏伝経典の菩薩思想」（『西義雄博士頌寿記念論文集』、大東出版社、昭和五六年三月）
「攝真実論外境批判章訳註（一）」（『勝又俊教博士古稀記念論文集』、春秋社、五六年九月）
「摂真実論外境批判章訳註（二）」（『壬生台舜博士頌寿記念論文集　仏教の歴史と思想』、昭和六十年二月）
「文珠・普賢」（『大乗菩薩の世界』金岡秀友博士還暦記念論文集、昭和六三年七月）
「初期大乗仏教」「中期・後期大乗仏教」「諸仏・釈尊」「仏教聖典」（『仏教文化事典』佼成出版社、平成元年十月）
「その宗教の開祖は」「教えの主旨は」など（『仏教、キリスト教、イスラーム、神道　どこが違うか』大法輪閣、平成三年十月）
「シャカ族滅亡物語に見られる非暴力の意味」（『高木訥元博士古稀記念論文集　仏教文化の諸相』山喜房佛書林、平成十二年十二月）
「ヒンドゥー教―ヴィシュヌ神の化身」（『ブッダ・釈尊』大法輪閣、平成十三年二月）
「大般涅槃経」（「初めての仏典入門」『大法輪』平成十六年一月）
「仏さまQ&A」（「仏さまがわかる事典」『大法輪』平成十六年三月）

雑誌論文

「Tattvasaṃgraha における三世実有批判について」（『印度学仏教学研究』第八巻第二号）昭和三五年三月

「宝性論における adhimukti について」（『印度学仏教学研究』第九号第一号）昭和三六年一月

「摂真実論における識説について」（『宗教研究』第三五巻十七十号）昭和三六年十二月

"The Examination of the External Objects in the Tattvasaṃgraha"（『印度学仏教学研究』第十巻第二号）昭和三七年三月

「摂真実論外境批判章における仏智の問題」（『宗教研究』第三六巻十七四号）昭和三七年十月

"On the Self-Cognition in the Tattvasaṃgraha"（『印度学仏教学研究』第十一巻第二号）昭和三八年三月

"Śāntarakṣita's Criticism on the Paramāṇuvāda in the Tattvasaṃgraha"（『印度学仏教学研究』第十二巻第二号）昭和三九年三月

「寂護の三世実有批判論—Tattvasaṃgraha, Trailokyaparīkṣā」（『東洋大学大学院紀要』第一集）昭和三九年三月

「寂護の識論—Tattvasaṃgraha, Bahirarthaparīkṣā」（『東洋大学紀要』第十八集　文学部編）」昭和三九年十月

「入楞伽経における不生の意味について」（『宗教研究』第三九巻第十八十号）昭和四十年一月

「シャーンタラクシタの外境批判について」（『印度学仏教学研究』第十三巻第二号）昭和四十年三月）

「入楞伽経における自内聖智の意義」（『宗教研究』第四十巻十八九号）昭和四一年十一月

"The Five Dharmas in the Laṅkāvatārasūtra"（『印度学仏教学研究』第十五巻第二号）昭和四二年三月

「入楞伽経如来常無常品の注釈的研究—入楞伽経本文研究の試み」（『東洋学研究』第二号）昭和四二年八月

「中期大乗経典における人間観の一考察—とくに入楞伽経を中心に」（『日本仏教学会年報』第三三号）昭和四三年三月

「入楞伽経における唯心説について」（『印度学仏教学研究』第十六巻第二号」昭和四三年三月
「入楞伽経刹那品の原典研究」（『東洋大学紀要』文学部編　第二三集）昭和四四年十二月
「入楞伽経におけるdharmanayaについて」（『印度学仏教学研究』第十八巻第二号）昭和四五年三月
「五法説の研究―特に『瑜伽師地論』『顕揚聖教論』『中辺分別論』などを中心に」（『東洋大学紀要』文学部編　第二四号）昭和四五年十二月
「入楞伽経における五法説の研究」（『東洋学研究』第五号）昭和四六年三月
「入楞伽経における不立文字論」（『東洋大学紀要』文学部編第二五号）昭和四七年一月
「入楞伽経研究ノート」（『三宝』五六、五七、五八、大東出版社）昭和四七年五～六月
「経典から見た禅の思想」（『アジア仏教史』鎌倉仏教　二）昭和四七年七月
「涅槃経・永遠なる存在の探求」（『アジア仏教史』鎌倉仏教　三）昭和四七年七月
「仏教思想史上の仏性論」（『東洋学術研究』第十一巻第四号）昭和四八年一月
「入楞伽経の如来蔵説について」（『印度学仏教学研究』第二二巻第二号）昭和四九年三月
「入楞伽経の如来蔵論」（『東洋大学大学院紀要』等十三集、昭和五二年二月）
「入楞伽経の唯心論」（『東洋学研究』第十一号、昭和五二年三月）
「入楞伽経三万六千一切集品訳註（一）」（『東洋学論叢』東洋大学文学部紀要第三十集・仏教学科中国哲学文学科篇Ⅱ、昭和五二年三月）
「シルクロードの仏教遺跡」（『大法輪』昭和五三年一月）
「入楞伽経三万六千一切集品訳註（二）」（『東洋学研究』、昭和五三年一月）

「入楞伽経三万六千一切集品訳註（三）」（『東洋学論叢Ⅲ』、昭和五三年三月）
「優しさ渇望の時代」（『CANDANA』、昭和五四年二月）
「ダライ・ラマの仏教」（『飛沫』、昭和五四年十一月）
「文明の興奮を鎮める宗教としての仏教」（小松左京氏との対談、『躍進』、昭和五四年五月）
「平和と信仰の人・ダライラマ―第十四世ダライラマの人と思想―」（『大法輪』、昭和五十年五月）
「入楞伽経無常品・現観品・如来常無常品・変化品訳注」（『東洋学論叢』東洋大学文学部紀要三四集、昭和五六年三月）
「禅思想の源流・入楞伽経の魅力」（『中外日報』、昭和五七年三月～四月）
「チベットにおける仏教と中国仏教との討論」（『仏教思想史』四号、昭和五七年四月）
「死は恐怖か」（『大法輪』昭和五七年七月）
「大いなる生命に生かされて―空海」（『生死永遠のいのち』、佼成出版社、昭和五七年七月）
「白道の旅人―一遍」（『旅行静寂の時を求めて』、佼成出版社、昭和五七年九月）
「ネパール仏教管見」（『中央学術研究所紀要』十二号、昭和五八年七月）
「釈尊とシェン・ラブ―Gzer-mig Ⅰ～Ⅲを中心に―」（『日本仏教学会年報』第五十号、昭和六十年三月）
「優しさの原点を探る」（『在家仏教』三九九号、昭和六十年十一月）
「平和、心の問題に立ち戻って」（『CANDANA』十七号、昭和六一年九月）
「栄西と塙検校―喫茶養生記を通して」（『温故叢誌』第四十号、昭和六一年十一月）
「井上円了のインド哲学研究―『外道哲学』を中心に」（『井上円了学理思想の研究』平成元年二月）

「涅槃とはなにか」（『大法輪』、平成元年二月）
「禅の源流を探る」（『大法輪』、平成元年二～四月号）
「アプテ：サンスクリット文章論入門（Ⅱ）時制と法（代表訳）」（『東洋大学文学部紀要』第二六集、平成二年二月）
「アプテ：サンスクリット文章論入門（Ⅲ）（代表訳）」（『東洋学論叢・東洋大学文学部紀要』第四三集、中国哲学文学科・印度哲学科篇XV、平成二年三月）
「シーサンパンナの仏寺」（『大法輪』、平成二年四月）
「このままでは仏教は亡びる―井上円了の書簡より」（『大法輪』、平成三年十二月）
「古代インドの経済諸概念―文法家パーニニが伝える古代インドの経済活動」（「自由課題報告書」、平成三年三月）
「非暴力の心を再び―インド宗教対立をめぐって」（『大法輪』、平成三年十一月～平成四年一月号）
「宗教と技術―善巧方便としての技術」（『ものづくりの技術について考える』㈳精密工学会ＣＩＲＰ国内委員会、平成五年五月）
「井上円了とインド哲学」（『印度哲学仏教学』第七号、北海道印度哲学仏教学会、平成五年十月）
「釈尊の生涯―休むことのない求道と救済の旅」（『心理と創造』第三四号、中央学術研究所、平成五年十二月）
「仏教研究の課題を考える」（『CANDANA』十二三号、平成六年六月）
「仏陀が説いたことば」（『大法輪』、平成七年二月号）
「向下門の哲学―百姓的哲学、井上円了の思想」（『宝積』第六号、平成七年一月）
「第一格の意味と用法―Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（一）」（『東洋大学文学部紀要』第四八集、平成七年三月）

「修行の方法」（『大法輪』九月号、平成七年九月）
「ヒンドゥー教の輪廻と解脱観」（『大法輪』第六二巻四号、平成七年四月）
「仏教をめぐるアジアの宗教・ヒンドゥー教」（『大法輪』第六二巻十号、平成七年十月）
"The Principle of Co-existence: A Buddhist View (Religion in the Age of Co-existence)," *Echoes of peace*, vol. 49, pp.6-10, NIWANO Peace Foundation, 1996.1
「古代インドの経済諸概念—文法家 Pāṇini が伝える古代インドの経済活動」（『宗教と経済の人間学的基盤に関する研究報告書』平成八年一月）
「第二格の意味と用法①—Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（二）」（『東洋大学文学部紀要』第四九集、印度哲学科篇『東洋学論叢』第二一号、平成八年三月）
「井上円了の哲学と宗教—向上門から向下門へ」（『日本近代仏教史研究』、平成八年三月）
「六波羅蜜としての禅定」（『大法輪』第六三巻三号、平成八年三月）
「モンゴル仏教の現状—弾圧から復興へ」（『中央学術研究所紀要』第二五号、平成八年十二月）
「第二格の意味と用法②—Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（三）」（『東洋大学文学部紀要』第五十集、印度哲学科篇『東洋学論叢』第二二号、平成九年三月）
「モンゴル仏教弾圧と復興」（『宝積』第十一号、平成九年七月）
「共生の原理を求める」（『CANDANA』十七二号、平成九年八月）
「第二格の意味と用法③—Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（四）」（『東洋大学文学部紀要』第五一集、印度哲学科篇『東洋学論叢』第二三号、平成十年三月）

「ブッダの悟りとは―ブッダ成道のドラマ」（『ブッダ・大いなる旅道一　輪廻する大地』、ＮＨＫ出版、平成十年六月）
「ダライラマと転生」（『輪廻転生』、大法輪閣、平成十年十一月）
「空とは何か―空観と救いの関係」（『ブッダ・大いなる旅道三　救いの思想・大乗仏教』、ＮＨＫ出版、平成十年十一月）
「第三格の意味と用法―Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（五）」（『東洋大学文学部紀要』第五二集、印度哲学科篇『東洋学論叢』第二四号、平成十一年三月）
「『共生』の現代的意味と仏教における『共生』の原理」（『仏教を中心として共生の原理の綜合的研究』、平成十一年三月）
「ヒンドゥー教のブッダ観」（『大法輪』四月号、平成十一年四月）
「共生の原理としての非暴力（不殺生）」（『日本仏教学会年報』第六四号、平成十一年五月）
「共生の原理としての仏教―特に非暴力の可能性について考える」（『中央学術研究所紀要』第二八号、平成十一年一月）
「第四格の意味と用法―Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（六）」（『東洋大学文学部紀要』第五三集、印度哲学科篇『東洋学論叢』第二五号、平成十二年三月）
「国粋主義の思潮と哲学館」（『現代日本と仏教』第二巻『国家と仏教』、平凡社、平成十二年五月）
「菩薩とは―その誓願と修行」（『大法輪』七月号、平成十二年七月）
「空の思想と実践」（『大法輪』七月号、平成十二年七月）

「新仏教運動と哲学館—境野黄洋と高嶋米峰を中心に」（『印度学仏教学研究』第四九号第一巻、平成十二年十二月）
「ヒンドゥー教から見た仏教」（『仏教と諸宗教との対話』『大法輪』一月号、平成十三年一月）
「第五格の意味と用法—Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（七）」（『東洋大学文学部紀要』第五四集、印度哲学科篇『東洋学論叢』第二六号、平成十三年三月）
「日本近代仏教の基礎を築いた人々（変革期の仏教一）」（『大法輪』九月号、平成十三年九月）
「新仏教運動の旗手たち—境野黄洋と高嶋米峰の理性主義・常識主義」（『大法輪』一月号、平成十四年一月）
「第六格の意味と用法—Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（八）」（『東洋大学文学部紀要』第五五集、印度哲学科篇『東洋学論叢』第二七号、平成十四年三月）
「自心の浄化と国土の浄化—共にあることによろこびを目指して」（『平和と宗教』第二一号、平成十四年十二月）
「第七格の意味と用法—Siddhāntakaumudī, Kārakaprakaraṇa 訳註（九）」（『東洋大学文学部紀要』第五六集、印度哲学科篇『東洋学論叢』第二八号、平成十五年三月）
「アーユルヴェーダの心身観」（『東洋思想の心身観』『東洋学研究』別冊、平成十五年三月）
「仏教に戦争が止められるか」（『大法輪』八月号、平成十五年八月）
「宗教とは何か」（『大法輪』七月号、平成十六年七月）

翻訳

ダライラマ十四世著『大乗仏教入門』（蒼洋社、昭和五五年一月）
ダライラマ十四世著『智慧の眼』（けいせい社、昭和六三年三月）

『ダライ・ラマ　智慧の眼をひらく』（春秋社、平成十三年七月）

書評

「ニロッド・C・チョウドリ／森本達郎訳『ヒンドゥー教』みすず書房」（『東京新聞』平成八年七月十四日）

「小長谷知紀『モンゴルの二十世紀』（中央公論社）」（『京都新聞』他十八紙（共同通信）、平成十六年九月）

新聞

「禅思想の源流―入楞伽経の魅力（『中外日報』昭和五七年三月三一日～四月四日）

「猿沢池と彌猴池」（『奈良新聞』平成四年二月十五日）

「インド、宗教暴動の原因は宗教対立か」（『仏教タイムズ』平成五年一月一日）

「復興に向かうモンゴル仏教」（『東京新聞』平成八年八月十三日～十四日）

編集

『仏教文化事典』（田丸徳善博士と共編、佼成出版社、平成元年十月）

連載

「親子でよむ仏教童話」（『躍進』平成四年一月～平成七年十二月　全三六回）

「新・仏典物語―釈尊の弟子たち」（『躍進』平成八年一月～平成九年十二月　全二四回）

「仏弟子に学ぶ」（『躍進』平成十年一月～平成十二年十二月　全二四回）
「モンゴル仏教紀行」（『春秋』No.四三五～四四四、平成十四年一月～平成十五年一月）
'Stories of the Buddha and His Disciples, 115'（Dharma World, vol.19-22, 1992～1995）
「身近な仏教語」（『法光』昭和五九年七月～昭和六三年三月）
「仏典の言葉」（『法積』vol.1～20, 平成四年七月～平成十四年一月）
「WHO'S WHO 素顔の評伝：武帝、鳩摩羅什、玄奘、法顕、慧遠、不空、百丈、慧可、如浄、スブーティ、プンナ、ウパーリ、ラーフラ、カッチャーヤナ、アヌルッダ、パスパ、ツォンカパ、アティーシャ、ミラレパ、ペメジュンネ、ザナバザル等」（『産経新聞』夕刊、平成八年四月～平成十年三月）

随筆・紀行文

「田んぼをつくる思想・日本人の宗教的土壌」（『青淵』三四一号、昭和五二年三月）
「大麦とサルと人間―生きているものの仲間」（『在家仏教』五九一号、平成十三年八月）
「殺すな（不殺生）の意味」（『在家仏教』五七三号、平成十二年二月）
「ガンガー水源の聖地を訪ねて」（『大法輪』昭和六二年十二月）
「シルクロードの秋」（『セメント工業』十六五号、昭和五六年一月）
「南インドの聖地を巡拝して」（『法光』正月号、昭和六一年一月）
「シーサンパンナの仏寺」（『大法輪』平成二年四月）

解説、その他

「アフガニスタンの仏教遺跡（写真十四葉付き）」（『毎日グラフ』別冊「旅する仏たち」、昭和五二年六月）
「文献案内」（『現代思想』第五巻第十四号　総特集・ブッダ、昭和五七年十二月）
「仏になることとは」（『大法輪』特集・仏教の基本を説く、昭和六十年三月）
「仏教経典の世界・関係史年表」（『仏教経典の世界』自由国民社、昭和六十年三月）
「文殊菩薩とは」（『大法輪』昭和六一年六月）
「仏教の核心を体得した舎利弗」（『大法輪』特集「釈尊の十大弟子」、昭和六一年十月）
「かくして哲学館は生まれた—若き哲学者・井上円了の思想と行動力」（『東洋大学報』通巻八一号、昭和六二年四月）
「白隠禅師の母」（『法光』正月号、昭和六三年一月）
「入滅のこと」「お釈迦さまの聖地」「お釈迦さまの伝記の名著」など（『大法輪』特集・お釈迦さま百科、昭和六三年一月）
「梵字の基礎知識」（『大法輪』特集・真言、梵字の基礎知識、昭和六三年四月）
「仏なぜなぜ事典」（項目執筆、『大法輪』昭和六三年五月）
「経典に直接触れる」（『大法輪』特集・私の仏教学、平成元年一月）
「教外別伝の〝活〟の哲学」（『SATYA』第十号、平成五年四月）
「井上円了」「境野黄洋」「高嶋米峰」（『大法輪』特集・心に残る近代の仏教者、平成五年五月）
「追悼・西義雄先生」（『大法輪』平成五年六月）

「仏教系大学の魅力と案内・東洋大学」（『大法輪』平成六年四月）
「首楞厳経」（『大法輪』特集・お経入門（上）、平成七年五月）
「入楞伽経」（『大法輪』特集・お経入門（下）、平成七年六月）
「ダライ・ラマ」（『大法輪』特集・世界の聖者たち、平成八年十二月）
「優しさの思想―仏教による共生の原理を求めて」（『臨済会会報』十八七～十八九号、平成九年三、六、九月）
「内モンゴルの校友」（『東洋大学校友会会報』十九四号、平成十年一月）
「梵天・帝釈天」「地天」「四天王」（『大法輪』特集・仏教の神々、平成十一年六月）
「仏陀の死後仏弟子たちはどうなりましたか」「仏教はどのように広まったのですか」など（『大法輪』仏教入門・初歩の初歩、平成十一年八月）
「日本仏教の重大事件」（『わが家の仏教』実業之日本社、平成十二年一月）
「釈尊伝から」（『大法輪』特集・心に残る仏教名話、平成十三年六月）
「自分が大切なら人にも大切に」（『真理と創造』四一号、平成十三年十一月）
「ヒンドゥー教・図解インドの神々」（『大法輪』特集・世界の宗教、へ伊勢十四年一月）
「涅槃経・ブッダ最後の姿」「維摩経―空に生きる」「勝鬘経―勝鬘夫人の誓い」（『大法輪』特集・初めての＜仏典＞入門）
「仏さまQ&A」（『大法輪』特集・仏さまがわかる事典、平成十六年三月）
「はやわかり　日本仏教」（『大法輪』特集・日本仏教がわかる事典、平成十六年十一月）

研究室報告

① 本年度をもって菅沼晃教授が停年退職されることとなり、一月二十日に「最終講義」と「囲む会」を開催した。満場の大教室での講義は、本号の巻頭に掲載されている。「囲む会」にも先生の受業生、本学並びに他大学の先生方をはじめとする、多くの有縁の方々のご参加を得ることができた。

② 本年度の新入生歓迎行事として、「日帰り研修旅行」を行った。臨済宗円覚寺派本山である鎌倉円覚寺の御協力を得て、管長猊下から法話を頂き禅堂において坐禅を実修する、という機会を持つことができた。新入生には大いに好評を博し、学生相互あるいは教員との交流を深めることができたと言えるだろう。円覚寺ならびに関係各位には厚く御礼申し上げます。

③ 本年度も大学院の研究発表会を前期（六月九日）と後期（十二月八日）に開催した。前期の発表者は、満達（D2）、三浦宏文（D3）、伊東昌彦（D1）、今野道隆（D3）の四名、後期の発表者は、赤坂史人（M2）、三上哲（M2）、佐竹正行（D3）、小嶋孝（M2）、菅野馨子（M2）、曽清満（M2）、林香奈（D1）、アラムラット・スタッス（D2）の八名であった。

④ 本年度のティーチング・アシスタントは、昨年度より継続の大学院後期課程の出野尚紀君と今野道隆君に、同じく後期課程の満達君を加えた三人が担当した。

⑤ 本年度の卒業論文・制作の提出者は、Ⅰ部が四十四名、Ⅱ部が十三名であり、大学院の修士論文提出者は五名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は以下の通りである。田村芳朗奨学基金賞受賞者—高橋　淳（Ⅰ部）、勧学奨学基金受賞者—トンカウオーン・プラスネット（Ⅰ部）、加賀谷昌子（Ⅱ部）、学友会学生研究奨励基金受賞者—栗原正和（Ⅰ部）、小田島久美（Ⅱ部）、赤坂史人（大学院）。

⑥ 本年度は研究室関係で四名の方が博士の学位を取得された。「甲」（課程博士）が佐竹正行、三浦宏文の両氏、「乙」（論文博士）が渡辺章悟、橋本泰元の両氏である。

平成十六年度業績（平成十六年一月～十二月）

菅沼　晃

〈著書〉

『ドラマ維摩経　全三幕』（単著、佼正出版社、平成十六年四月、三七〇頁）

『モンゴル仏教紀行』（単著、春秋社、平成十六年七月、二五七頁）

〈論文〉

「宗教とは何か」（単著、『大法輪』七月号、平成十六年七月一日、A5版、五八～六五頁）

「早わかり　日本仏教」（単著、『大法輪』十一月号、平成十六年十一月一日、A5版、六八～七九頁）

〈辞典等分担執筆〉

「仏さまQ&A」（単著「仏さまがわかる事典『大法輪』三月号、平成十六年三月一日）

「大般涅槃経」など（単著「初めての仏典入門」『大法輪』一月号、平成十六年一月一日）

〈書評〉

「小長谷知紀『モンゴルの二十世紀』（中央公論社）」（『京都新聞』他十八紙（共同通信）、平成十六年九月）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会／日本仏教学会／日本宗教学会／日本近代仏教史学会／禅学研究会

〈教育活動〉

学内担当科目

学　部　インド宗教史A・B（朝霞、I部／白山、II部）

インド古典講読（朝霞、I部）

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

大学院　サンスクリット文献研究I・インド哲学研究指導I（前期）

インド哲学特殊研究I・インド哲学研究指導I（後期）

〈社会活動〉

大法輪石原育英会理事／庭野平和財団評議員／東洋大学校友会会長

講演「世界平和と宗教―生命の尊さについて考える」（栃木県仏教会講演会、平成十六年一月、西那須野市民会館）

講演「哲学のすすめ―人間を創る教育を」（甫水会埼東支部、平成十六年二月、春日部福祉会館）

講演「玄奘三蔵―シルクロード・インドへの旅」（野田文化講演会、平成十六年三月、興風会館）

講演「ヨーガと仏教」（日本ヨーガ光麗会、平成十六年七月、

宇治市）
講演「世界平和と宗教の役割」（神奈川県宗教連盟、平成十六年九月、神奈川県政会館）
講演「宗教と人生」（禅林寺講演会、平成十六年十月、東京）
講座「サンスクリット講読」（朝日カルチャーセンター新宿、平成十六年一月～十二月、東京）
講座「正法眼蔵随聞記をよむ」（朝日カルチャーセンター千葉、平成十六年一月～十二月、千葉）
講座「維摩経をよむ」（清風仏教講座、平成十六年四月～九月、全生庵、東京）
講座「禅の源流―慧能」（黄檗宗勉強会、平成十六年九月、東京）

森　章司

＜論文＞
「摩訶迦葉（Mahākassapa）の研究」（本澤綱夫と共著『中央学術研究所紀要　モノグラフ篇』No.9「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究（九）」、中央学術研究所、平成十六年五月二十日、A4版、一～一四〇頁）
「見えてきた『釈尊の生涯』」（単著『真理と創造』第四四号、中央学術研究所、平成十六年十一月十五日、A5版、七七～八五頁）
「釈尊のめざされたもの―原始仏教聖典をとおして―」（単著『平和と宗教』第二三号、庭野平和財団、平成十六年十二月十日、A5版、五～二一頁）

＜学会活動＞
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会理事／地域文化学会理事／日本仏教学会／日本宗教学会／仏教思想学会／
研究発表
「仏教はどのようにして仏教になったか」（東洋大学東洋学研究所研究発表例会、平成十六年六月十二日、東洋大学）

＜調査活動＞
「釈尊教団形成過程の研究」（平成十六年度東洋大学海外研究費による。平成十六年九月一日～八日、ミャンマーのヤンゴン・パガン・マンダレーの仏教寺院の運営方法と比丘の生活についての調査）

＜教育活動＞
学　部　仏教学概論（朝霞Ⅰ部／白山Ⅱ部）
　　インド哲学仏教学演習（白山、乗り入れ）
　　アビダルマ哲学（白山Ⅱ部）
大学院　初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導（前期）
　　仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（後期）

＜社会活動＞
庭野平和財団評議員／大法輪石原育英会評議員
講演「釈尊は伝統宗教とどのように対決されたか」（一隅会、

平成十六年九月十六日、芝パークホテル）
講演「釈尊教団はどのように形成されたか」（武蔵野大学日曜講演会、平成十六年九月十九日、武蔵野大学）

＜大学・学部の管理・運営＞
東洋学研究所所長／生涯学習センター運営委員／教職運営委員会委員

川崎信定

＜辞典等分担執筆＞
「千仏洞」・「仏陀」・「ジャータカ」・「結集」・「密教」・「仏教」・「パーリ語」・「上座部仏教」・「曼荼羅」・「僧伽」・「陀羅尼」・「唯識」・「大蔵経」・「大乘仏教」（『山川　世界史小辞典』改訂新版、山川出版社、平成十六年四月）

＜その他＞
「河口慧海師あて第九世パンチェンラマ書簡（一九〇七年九月一九日付け）」（単著、チベット文より翻訳、『河口慧海著作集』別巻3、うしお書房、平成十六年四月、三九五～三九八頁）
「河口慧海師あてチベット草書体書簡（日付けなし）」（単著、チベット文より翻訳、『河口慧海著作集』別巻三、うしお書房、平成十六年四月、三九九～四〇二頁
「コラム　第六世ダライラマ・ツァンヤンギャムツォ歌集より」（チベット語翻訳、菅沼晃：『モンゴル仏教紀行』所収、春秋社、平成十六年七月、一九八～一九九頁）

＜学会活動＞
所属学会ならびに役職
日本宗教学会理事／日本西蔵学会委員／仏教思想学会理事／比較思想学会評議員／日本印度学仏教学会評議員／東方学会評議員

＜教育活動＞
学内担当科目
学部　宗教学概論（白山、乗入れ）
仏教思想論Ⅱ（白山、乗入れ）
チベット文献講読（白山、乗入れ）
インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）
大学院　仏教学演習・仏教学研究指導（前期）
仏教学特殊研究1・仏教学研究指導（後期）
学外担当科目
インド思想史（早稲田大学文学部）
東洋哲学特殊問題（一）：インド・チベット仏教文献講読研究（早稲田大学大学院文学研究科）
MD仏教学特論A（仏教哲学・一切智の研究）（大正大学大学院）
総合文化プログラム（文化情報科学群・放送大学大学院）

＜社会活動＞
団体役員等

財団法人仏教学術振興会評議員／財団法人東方研究会理事／財団法人仏教交流センター評議員／東京大学仏教青年会評議員／真言宗豊山派教学審議会委員／東洋学報（東洋文庫）編集委員／財団法人東洋文庫兼任研究員

講演

「川崎市の中のアジア的伝統」（『東洋大学シンポジウム・イン・川崎―国際都市・川崎市の未来を拓く―アジアとの新たな連携を求めて―』、平成十六年十月十六日、川崎市産業会館）

＜大学・学部の管理・運営＞

大学院文学研究科・仏教学専攻主任／東洋大学東洋学研究所員／日本私立学校振興・共済事業団平成十六年度学術研究振興資金に係る研究「日本における死への準備教育―死の実存的把握をめざして―」（研究代表者　高城功夫：分担者課題：「仏教にみる死生観／東洋大学学術研究センター研究助成審議会委員／㈶井上円了記念学術研究センター運営委員

竹村牧男

＜著書＞

『華厳とは何か』（単著、春秋社、平成十六年四月二十日、三三三頁）

『金剛仙論　下』（大竹　晋と共著、『新国訳大蔵経　釈経論部十一下』大蔵出版、平成十六年八月、三三五～六五六頁）

『西田幾多郎と鈴木大拙』（単著、大東出版社、平成十六年十一月三十日、四三四頁）

＜論文＞

「仏教の死生観（単著、細見博志編『生と死を考える――「死生学入門」金沢大学講義集』、北國新聞社、平成十六年一月三十日、五四～七五頁）

「大拙の道元観」（単著、『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』第十八号、平成十六年三月二十五日、四一～六五頁）

「西田幾多郎と鈴木大拙――その魂の交流について」（単著『点から線へ』四十五号、西田幾多郎記念哲学館、平成十六年三月三十一日、二～二四頁）

「唯識のこころ」（単著『在家仏教』十一月号、平成十六年十一月、㈳在家仏教協会、六六～八四頁）

「大乗仏教に見る平和への道」（単著『平和と宗教』二三号、庭野平和財団、平成十六年十二月二〇日、一二～三四頁）

＜書評＞

「高田信良『宗教の教学――親鸞のまねび』」（単著『宗教研究』第七十八巻第二輯、平成十六年九月、四四六～四五〇頁）

＜その他＞

「鈴木大拙のことば　西洋とは異なる、禅による「自由」」（単著『週刊朝日百科仏教を歩く』No.三十、『仏教復興に立ち上がる近代の仏教者たち』、朝日新聞社、平成十六年五月十六日、

一三～一五頁）
「秋月龍珉『鈴木大拙』解説」（単著、講談社学術文庫、平成十六年四月十日二六〇～二六六頁）
「お能に想う」（単著、『興福』百二十六号、興福寺、平成十六年十二月一日三～四頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会理事／日本宗教学会理事／比較思想学会理事／東方学会

研究発表
仏教思想学会第二十回学術大会、十人の発表者の中二人に司会担当、理事会出席、平成十六年六月二十六日、国際仏教学大学院大学／東洋大学国際共生社会研究センター主催国際シンポジウム「環境共生社会の構築に向けて」において、「仏教から見た「環境と共生」」の題で講演し、パネリストを勤めた、平成十六年七月九日、東洋大学井上円了ホール／東洋大学シンポジウムin川崎「国際都市・川崎市の未来を拓く―アジアとの新たな連携を求めて」において、シンポジウムのコーディネーターを務めた、平成十六年十月十六日、川崎市産業振興会館

〈教育活動〉

学内担当科目
学　部　日本仏教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）
インド哲学仏教学演習（朝霞、Ⅰ部）
インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）
インド哲学仏教学研究法B（白山、Ⅱ部）
大学院　日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（前期）
仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ（後期）

学外担当科目
総合科目「生と死を見つめて――死生学入門」（金沢大学、平成十六年五月三十一日）
『成唯識論』研究（東京大学文学部、夏学期）
比較思想論特講（横浜市立大学大学院国際文化研究科、通年、集中）

〈社会活動〉

講演「良寛さまの世界」（仏教聖典を生活に活かす会講演会、平成十六年二月二十八日、つくば市恵光寺）
講演「善財童子に学ぶ」（在家仏教協会講演会、平成十六年四月二十四日、大手町ビル）
講演「日本浄土教のこころ」（信道講座、平成十六年八月八日、真宗大谷派名古屋別院内名古屋教務所）
講演「般若心経を読む」（仏教聖典を生活に活かす会講演会、平成十六年十月三十日、十一月二十七日、つくば市恵光寺）
講演「華厳思想に学ぶ」（素修会講演会、平成十六年十二月六日、日本工業倶楽部ビル）
講座「漢文仏典講読会」（東京大学仏教青年会、第一・三木曜

日）
講座「『正法眼蔵』に学ぶ」（万年山青松寺仏教文化講座、第四水曜日）
〈大学・学部の管理・運営〉
文学部インド哲学科Ⅱ部主任／学術研究推進センター副センター長

橋本泰元

〈翻訳〉
「カビール『ビージャク』和訳余滴－ブラーフマン（バラモン）の知性の三〇詩節」（単著『東洋学論叢』二九（東洋大学文学部研究紀要第五七集）平成十六年三月二〇～二五頁
「クリスチャン・ブイ著『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャッド』―抄訳　原著の第4～第5章の全訳」（『東洋学研究』四一、東洋大学東洋学研究所、平成十六年二月、一四五～一六九頁
〈論文〉
Medieval Hindi Literature in Japan: Special Reference to Translating Kabir's *Bijak*, *Sachudanand*, *Unita* & *Teiji Sakata (eds.), Imaging India Imaging Japan: A Chronicle of Reflections on Mutual Literature*, Delhi: Dept. of East Asian Studies & Japan Foundation, 2004, pp.286-292.
〈学会活動〉
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会評議員／日本宗教学会／日本南アジア学会紀要編集委員／日本佛教学会
研究発表
シンポジウム「南アジアにおける豊かさの位相」―中世中期北インドの民衆宗教家カビール（一三九八～一四四八年ころ）の場合―（ペーパーのみ）、（十月三日）
〈調査活動〉
ロンドン大学＝東洋・アフリカ研究所およびブリティシュ・ライブラリーにおいて中世
北インドの民衆宗教家関連の写本の調査（平成十六年八月二六日～同九月六日、平成十六年度国内特別研究費による）

渡辺章悟

〈論文〉
「チベット語訳『能断金剛般若経』校訂テキスト（一）」（単著『東洋学研究』四一、東洋大学東洋学研究所、平成十六年三月、一〇五～一二〇頁）
「仏教の死後観と十三仏信仰」（単著『平成十四年度～平成十五年度科学研究費補助金［基盤研究Ｃ２］研究成果報告書』研究代表高城功夫、平成十六年三月、一三～一三頁
〈学会活動〉
所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会（幹事・評議員）／日本仏教学会／日本宗教学会／仏教思想学会／日本西蔵学会／北海道印度哲学仏教学会／国際佛教学会（IABS）

研究発表

「笈多訳『金剛能斷般若』の真偽」（北海道印度哲学仏教学会第二十回学術大会、平成十六年七月三十一日、北海道大学）

＜調査活動＞

「大乗仏教の起源と実態に関する総合的研究」（平成十五年度科研費による研究、「大乗仏教の興起と法滅思想」というタイトルで研究発表、東京大学・山上会館、平成十六年三月二十六日＜研究代表者：斉藤明・東京大学＞

＜教育活動＞

学　部　インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

仏教思想論Ⅰ（白山、乗入れ）

インド仏教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）

総合科目A、B、F（東洋大学校友会寄附講座、白山、乗入れ）

総合科目D「社会に生きる知恵」（白山、乗入れ）前期1回担当

仏教と社会（白山、乗入れ）後期1回担当

大学院　サンスクリット文献研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅲ（前期）

インド哲学特殊研究Ⅲ・インド哲学研究指導Ⅲ（後期）

＜社会活動＞

財団法人仏教伝道協会英訳大藏經編集委員会委員／同協会仏教聖典編集委員会委員／財団法人東方研究会研究員

講演「明治の仏教復興運動とオルコット」（浄土真宗大谷派真浄寺・定例講演会、平成十六年六月二十四日、文京区向丘・真浄寺）

＜大学・学部の管理・運営＞

インド哲学科第Ⅰ部主任／大学協議会委員／文学部内資格審査委員会委員／文学部内外国語委員会委員

伊吹　敦

＜論文＞

「境野黄洋と仏教史学の形成（下）」（単著、境野黄洋著作集一『中国仏教Ⅰ　支那仏教精史（下）』解説、うしお書店、平成十六年二月、一～三六頁）

「『法句経』の思想と歴史的意義」（単著『東洋大学文学部紀要』五十七（印度哲学科篇二十九）、平成十六年三月、一～六五頁）

「『念仏三昧宝王論』に見る禅の動向」（単著『東洋学研究』四十一、平成十六年三月、一二一～一四三頁）

「『續高僧傳』達摩＝慧可傳の形成過程について」（単著『印度學佛教學研究』五十三―一平成十六年十二月、一二四～一三〇頁）

＜その他＞

「達摩から東山法門へ　要説・中国禅思想史1」（単著『禅文化』

百九十二、平成十六年四月、四二〜四九頁）
「北宗禅の成立　要説・中国禅思想史2」（単著『禅文化』百九十三、平成十六年七月、六四〜七二頁）
「荷沢神会の登場　要説・中国禅思想史3」（単著『禅文化』百九十四、平成十六年十月、二八〜三六頁）
＜学会活動＞
所属学会ならびに役職
日本印度学仏教学会／仏教思想学会／早稲田大学東洋哲学会／日本仏教学会／㈶東方学会／東アジア仏教研究会
研究発表
「『續高僧傳』達摩＝慧可傳の形成過程について」（印度学仏教学会第五十五回学術大会、平成十六年七月二十四日、駒沢大学）
「《人間仏教》的来源和其歴史性意義」（「人間仏教的発展与実践」学術研討会、平成十六年十一月十三日、台湾・慈済大学）
「『續高僧傳』に見る達摩系習禅者の諸相」（東アジア仏教研究会、平成十六年十二月五日、東京大学仏教青年会会館ホール）
＜教育活動＞
学内担当科目
学　部　インド哲学仏教学研究法B（朝霞、I部、秋学期）
中国仏教史（朝霞、I部／白山、II部）
禅の思想と文化（白山、乗入れ）
東洋思想AB（白山、II部）
インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）
大学院　中国仏教研究I・仏教学研究指導IV（前期）
＜社会活動＞
㈶東方研究会兼任研究員
＜大学・学部の管理・運営＞
文学部内入試小委員会委員／文学部内カリキュラム検討委員会委員／文学部内予算委員会委員／東洋学研究所運営委員・編集委員会委員

沼田一郎

＜論文＞
Manusmṛti 王権論における第八、九章の意義（上）（単著『東洋大学文学部紀要』五十七〈印度哲学科篇二十九〉、平成十六年三月、二六〜三八頁）
Manusmṛti 第7章の酒の弊害―『大智度論』第十三巻に見られる飲酒の問題に関連して―（単著／『仏教学』四十六、平成十六年十二月二十日）
＜学会活動＞
所属学会ならびに役職
日本南アジア学会／日本印度学仏教学会／日本仏教学会／仏教思想学会／仏教学会／
研究発表

「古典インドにおける酒の弊害」（東洋大学東洋学研究所研究発表例会、平成十六年六月十二日、東洋大学）

「Yājñavalkyasmṛti 第2章における司法主題の配置について」（日本印度学仏教学会第55回学術大会、平成十六年七月二十四日、駒沢大学）

「Manusmṛti 第7章における酒の弊害―『大智度論』第十三巻に見られる飲酒の問題に関連して―」仏教思想学会二十回学術大会、平成十六年六月二十六日、国際仏教学大学院大学）

東洋学研究所プロジェクト『東洋思想における個と共同体の関係の探求』（代表者：竹村牧男）研究会にて発表（平成十六年九月二十九日）

＜調査活動＞

「インドの共同体社会と個人の宗教信仰についての実地調査」（東洋学研究所プロジェクト『東洋思想における個と共同体の関係の探求』（代表者：竹村牧男）予算による／平成十六年九月二日～十五日、インド・ウッタラーンチャル州ガンゴーットリー地方）

＜教育活動＞

学内担当科目

学　部　サンスクリット文献講読A・B（朝霞、Ⅰ部）

ヒンドゥー教概説（朝霞、Ⅰ部）

インド文化論Ⅰ（白山、乗入れ）

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

インド古典哲学（白山、Ⅱ部）

学外担当科目

宗教学（高千穂大学）

＜大学・学部の管理・運営＞

文学部情報機器運営委員／文学部インド哲学科選書担当者

平成十六年度演習ゼミ活動報告

竹村牧男

インド哲学仏教学演習①　朝霞

①テーマ「中世日本仏教の研究」
②メンバー　麻原さと子（幹事）他二年生十二名
③活動報告

本年度は、良遍の『法相二巻抄』を読んだ。毎回、予習を課し、各回とも一人二、三回は当たるような形式で読み進み、上巻および下巻の途中まで読むことができた。このテキストは、良遍が母に贈った唯識の入門書と言われるもので、大乗のアビダルマの基本を学ぶことができたと思う。

なお、九月に、鎌倉に日帰りでゼミ旅行を行い、覚園寺・杉本寺・報国寺を回ったあと、妙本寺で写経を行った。

島田茂樹

インド哲学仏教学演習②　朝霞

①テーマ「サンスクリット語文献講読」
②メンバー　井原知子（幹事）、他二年生十六名
③活動報告

一年間を通じて、『マヌ法典』のサンスクリット語原典を講読した。年度の初めに、予め学生たちの分担箇所を決めておき、毎回一人あるいは二人の学生が当たるようにした。学生は、テキストのデーヴァナーガリー文字とそのローマナイズ、連声、単語の性・数・格、動詞であれば語根・人称・数・態・法・時制等の文法の解説、そして全体の翻訳の書かれた詳細な自分の予習ノートを作成し、それをコピーしたものを全員に配布し、さらにそれと同じものを黒板に板書する形式をとった。そして、それに対してゼミ生たちが質疑応答し、最後に教員が補足も含め再度説明並びに関連事項（例えば、天地創造神話が登場したときには聖書や他の古代神話と比較）の解説を行った。

前期は語学力不足と学生間の遠慮もあって、なかなか討議が進まなかったが、後期は非常に活発な討論もなされるようになり、時には教員の知的好奇心を刺激するような指摘も出された。殊に、混沌とした暗黒からなる世界の原初的形態（中性で統一）から、男性的要素と女性的要素の結合によって、ブラフマン（男性）そして世界が誕生していく過程は、和訳では味わうことのできない醍醐味があり、原典解釈のおもしろさと重要性を感じたようであった。また、休講（教員病欠）の折りには、教室に来ていた学生たちで、当該箇所の予習の解釈の違いをめぐって討論したこともあった、と後日聞き、その熱心さと意欲に感服している。

その他としては、コンパを春（四月）と冬（十二月）の二回行い、夏期休暇（九月）には二泊三日で日光において合宿を行った。世界遺産の二社一寺の見学や、夜のミーティングなどを通して、教員、そして学生間の親睦がより養われ、このことは後期の授業

にも大いに影響した。

最後に一年間を振り返り、まず学生たちが学問の楽しさ、奥深さを実感してくれたこと、語学がある程度進展したこと、そして学生たちの間に素晴らしい仲間意識が芽生えたことが、一番の成果だったと思う。

沼田一郎

インド哲学仏教学演習①　白山（乗入れ）

①テーマ「古代インドの社会と文化」

②メンバー

③活動報告

今年度はサヴァティカルをとられた橋本泰元教授のゼミ生を一部受けいれ、一年間指導することとなった。前年度に引き続き、A.L.Basham: The Wonder that was India を講読し、できるだけ正確に翻訳することと、関連資料や指摘されている引用箇所を収集して報告するように求めた。今年度は人数が増えたため、一回につき三名程度のグループで発表することにしたが、これは功罪相半ばする結果となった。分担することによって発表内容の幅は広がったが、一回あたりの統一性は失われがちであったといえよう。

夏休み中に本書の邦訳が刊行され「英文読解」としては意義が薄れたので、後期からは来年度の内容を試行することにした。Kauṭilya: Arthaśāstra を用いて、関連する資料との比較検討を訓練することを眼目とした。邦訳を用い、かつ比較対象を限定したので、文献研究についてある程度の「雰囲気」を感じることはできたであろう。来年度はより原典に密着した内容にしたい。

夏休みの合宿やコンパなどに関しては、全員参加は困難であったが、参加者にとってはよい経験となったと思われる。

菅沼　晃

インド哲学仏教学演習②　白山（乗入れ）

①テーマ「インド思想の人間観」

②メンバー　木村乃梨子（幹事）、左治木淳子（副幹事）、青木宏治（副幹事）、小林由加子（記録係）、佐々木加代（記録係）他、四年生十九名、三年生八名、二年生六名

③活動報告

一．日常活動

A　哲学班は Śaṅkara 作 Ātmatbodha 講読発表

B　叙事詩・文学班は Rāmacarita 講読発表

C　Āyurveda 班は Aṣṭāṅgahṛdaya, Sūtrasthāna 講読発表

D　仏教班は『宝性論』九喩の Skt.文講読発表

二．インド思想研究会との合同合宿。八月三～五日、山中湖セミナーハウス。三日間で約五十三名参加。

三．報告書（最終号）作成。このゼミ最後の活動は、四年生を中心にチューターの協力を得て充実したものとなった。

渡辺章悟

インド哲学仏教学演習③　白山（乗入れ）

①テーマ「大乗仏教の研究」

②メンバー　中村紗綾香（幹事）他、四年生二名、三年生六名、二年生三名

③活動報告

今年のゼミは特定のテクストを講読するという形式はとらず、ゼミの構成員が自主的に研究テーマを選び、それを課題として各自がレポートするという形式をとった。

具体的には最初にゼミの共通テーマを「大乗仏教の成立と展開」と決定し、これに「個人テーマ」を組み合わせて、毎回発表してもらうという形態をとった。毎回の発表者は必ずハンドアウトを用意し、質問に備えることと、ゼミ参加者は必ず全員が一回以上質問することを義務づけた。

司会も原則的にはゼミ長が行ない、担当教員は最後に纏めるときにのみ指導するにとどめた。最初はぎこちない運営であったが、次第に慣れてきて、毎回の発表は充実し、時間が足りなくなることがしばしばであった。ただし、発表者の出来如何によって充実度が極端に異なるため、運営に苦労したこともあった。この感想は参加者共通の意識ではなかったかと思う。

夏休みには千葉県鴨川市のセミナーハウスで二泊三日の合宿を行なった。ゼミ員ほぼ全員が出席し、個人テーマを中心とする研究発表、および、英文の仏教聖典の講読を行った。夜は花火とソーマ祭りで盛り上がった。

今年度の発表は、予め次週の発表者のハンドアウト提出を厳格にしたこともあって、質問するものも多かった。発表は比較的よく纏まっていて、その中にはこのまま卒論につなげていけそうな発表も見受けられた。出席率も比較的良かったと思うが、後期には遅刻者が目立った。今後の反省としては、それぞれの発表の連関と連続性を如何に保つかということと、発表の質の向上という点が課題である。

森　章司

インド哲学仏教学演習④　白山（乗入れ）

①テーマ「原始仏教研究」

②メンバー幹事：安田卓史（前期幹事）、仙尼晶（後期幹事）四年生六名、三年生五名、二年生三名、大学院生六名

③活動報告

例年通り、年度初めの六回は大学院生の協力も得ながら、原始仏教概説、原始仏教資料概説、卒業論文（制作）の書き方、電子資料の使い方などを講義し、図書館見学を行った。その後研究活動に入った。研究は共同研究と個人研究の二本立てで進めた。

共同研究の今年度のテーマは学生と相談したうえで「阿難の研究」とした。まずタイからの留学生グループが「Manoratha-pūraṇi (Aṅguttara-nikāya Ahakathā) における阿難伝の和訳」を行い、日本人学生は、森が進めている「原始仏教聖典資料による釈尊伝

の研究」のために収集してあったデータから、阿難が登場するデータを提供し、これを「阿難の生涯」「阿難は釈尊とどのようにかかわったか」「阿難は一般人・王族・外道とどのように関わったか」の三つのテーマに分けて、グループ研究を行った。この研究成果は年度末に発行する『森ゼミ紀要』第十三号（「原始仏教研究」9））に掲載する。

個人研究は四年生の卒業論文（制作）テーマに関する研究、三年生以下は卒業論文（制作）を視野に入れた自由研究とした。原則として月の第一週はこの指導に充て、その発表は九月二十二日から二十四日までの二泊三日のゼミ合宿において行った。コンパの時間を除いて、びっしりと詰まった充実した合宿であった。また、雨安居期間中のために住所を離れられないタイ留学僧については、夏休み後の平常授業時間中に研究発表を行った。個人研究のうち卒業論文（制作）についてはその要旨を、優秀論文があればその全文を『紀要』に掲載する。

なお本ゼミは、年間十八回以上出席しないと単位を与えない（合宿を含めて全授業回数は二十五回ほどとなる）、三〇分以上の遅刻者は〇・五回とみなす、などの厳しい条件をつけているためか、希望者が少ない。何らかの対応をしなければならないかも知れない。

ゼミのホームページ（http://www2.toyo.ac.jp/~morimori/）へのアクセスは、この一年間で約四、〇〇〇件で、二年間で合計八、五七五件（十二月十九日現在）となった。一般に公開している「掲示板」では、「霊魂はあるか」「縁起とは何か」というテーマで活発な意見交換が行われた。

伊吹　敦

インド哲学仏教学演習⑤　白山（乗入れ）

①テーマ「禅思想研究」

②メンバー　武内賢一郎（幹事）、四年生九名、三年生七名

③活動報告

昨年度までは漢文で書かれた文献をテキストとしてきたが、学生の要望に応える形で、今年は趣向を変えて道元の『正法眼蔵』をテキストに選んだ。当初は、漢文が和文になったという点では「取っつきやすくなった」という意見があったが、読み進めるうちに、そうした楽観的な見方は消え、「わからない！」が学生たちの口癖になってしまった。確かに道元の特殊な文体は難解であって、それに初めて直面して戸惑わないものはいないであろう。しかし、更に読み進んでゆく中で、コツをつかみ、深い理解に達する学生がでてきたことは喜ばしいことであった。しかし、全体としてみれば、そうしたことは極く一部の学生に見られたに留まるから、授業方法等について、いっそうの工夫が必要であると痛感している。

ゼミ活動のもう一つの柱である卒論指導については、同じ四年生でも、卒論が必修の学生とそうでない学生が混在するというカリキュラム上の事情もあって、授業の中で本格的に取り組むこと

ができなかった。学生の取り組みが遅れがちで、充実した内容のものが乏しかったのも、多くは教員の責任であると思う。

課外活動では、夏休みに二泊三日の日程で会津若松に旅行した。宿に辿りつけるのか心配になるほどの恐ろしいほどの田舎のコテージに泊まり、五色沼を歩いたり、遊覧船に乗ったりして回ったが、特に星を見るために、夜中、山道を歩いたのはよい想い出となった。ここ数年来の傾向として、「勉強よりも親睦」というのが当ゼミの合宿の目的になっているが、学生同士が親密になることで授業運営とって非常によい刺激になっているので、最近は、これはこれで良いことだと思うようになってきている。

竹村牧男

インド哲学仏教学演習⑦　白山（乗入れ）

①テーマ「日本における諸仏諸尊信仰の形態と理論」

②メンバー　佐古弘純（幹事）、櫻田　純（副幹事）、四年生五名、三年生十三名、二年生四名

③活動報告

本年度より、従来のテーマを変えて、「日本における諸仏諸尊信仰の形態と理論」を探求することとした。これは、「日本仏教には、釈迦牟尼仏・薬師如来・阿弥陀仏等の信仰、また観音菩薩・不動明王・愛染明王・帝釈天・毘沙門天・弁才天等の信仰が見られ、民衆の生活を支えている。これらの信仰は、寺院ごとの個別の特徴を有していることもあり、たとえば同じ観音信仰でも、対象によって独特のものがあるようである。さらにしの信仰の背景には、『法華経』や密教における化身の思想もあろう。それは、本地垂迹説にもなり、神仏習合の形も産み出した。これらの信仰の具体的なあり方と、その背景にある仏教思想の論理を究明して、日本人の宗教心の特質を解明する」ことをねらいとしたものである。まず、春学期は、オリエンテーションのあと、四年生六名による、卒論構想発表を行ない、その後、順次、本年度のテーマに沿った研究発表による演習を行った。秋学期も引き続き、同テーマでの研究発表による演習を続けた。扱われた対象は多様性に富み、阿弥陀仏、薬師如来、大日如来、観音菩薩、虚空蔵菩薩、地蔵菩薩、不動明王、弁才天、毘沙門天、大黒天、摩利支天などにわたった。今年度のテーマは、学生にとって、文献学的アプローチによるべきか、民俗学的アプローチによるべきか、迷う場合が多かったようで、また、各信仰の根拠となるべき文献の発見がむずかしかったようでもあり、通俗的なガイドブックによる紹介で終ってしまう場合も少なくなかった。しかし次第にこの研究の要領をつかんできたようで、発表の内容も一定の水準に達しつつあった。来年度も同じテーマで研究を続ける予定であり、来年度はさらにその本質を掘り下げ、日本人の信仰意識の特質に迫ってほしいと思う。新歓コンパ・追い出しコンパのほかに、夏季には、九月六～八日に、新設されたばかりの「富士見高原セミナーハウス」において、二泊三日の合宿を行った。研究発表は、第二日に、本年度のテーマに沿ったものがなされ、夜は懇親の会とした。ちょ

うど、台風の接近に見舞われ、天候にめぐまれず、付近の散策もままならない状況になったが、最終日には、近隣の牧場に寄って遊ぶなどして帰京した。

川崎信定

インド哲学仏教学演習⑧　白山（乗入れ）

①中観・唯識思想基礎的原典の講読研究――『唯識二十論』
②メンバー　貴貫智裕（幹事）、四年生三名、三年生四名、二年生二名、大学院生二名
③活動報告

インド大乗仏教の重要教理の一つである唯識思想の基礎的原典の講読を通してテキスト批判・文献取り扱いの基本を養成し、今後の専門的文献研究・論文執筆のための基盤を作ることを目的としたセミナー。今年度は、前年度に引き続き、四世紀ごろにヴァスバンドゥ（世親）が著した唯識思想の代表的な論書・二十の韻文からなる『唯識二十論』を取り上げた。上級生から下級生まで一回に二人ほどがサンスクリット原文を担当する輪番制。担当が廻ってきた週はローマ字テキストとレジュメ翻訳のコピーを当番者が授業前に作成・配布して、まずテキストを正確に読むことを心掛けた。それに続いて「夢・幻で経験したものと現実の認識との違い」などのテーマでクラス全員でディスカッションを行なった。

夏の合宿は九月三・四日に新装なったばかりの鴨川セミナーハウスで一泊二日をかけて、四年生による卒論中間発表と二・三年生による「マンダラとは？」のテーマ討論。夜は先生の部屋に集まっての飲み会。

コンパでの楽しい雰囲気とともに、毎回の授業の「とにかくサンスクリット原典を直接読もう」との申し合わせは、苦しかったけれど実力の結実は疑いない。

平成十六年度開講科目

（従前の通年科目は一年生対象の場合A（春）・B（秋）に分かれるが、担当者が同一の場合はその区別は省略して記した）

〈I部〉

朝霞開講科目

インド宗教史　菅沼　晃
仏教学概論　森　章司
ヒンドゥー教概説　沼田一郎
インド仏教史　渡辺章悟
中国仏教史　伊吹　敦
日本仏教史　竹村牧男
サンスクリット文献講読　沼田一郎
インド古典講読　菅沼　晃
インド哲学仏教学研究法A　渡辺章悟
インド哲学仏教学研究法B　伊吹　敦
インド哲学仏教学演習①　竹村牧男
インド哲学仏教学演習②　島田茂樹

白山開講科目

インド古典哲学　宮本久義
アビダルマ哲学　森　祖道
卒業論文（制作）　菅沼　晃

〈II部〉

インド宗教史　森　章司
仏教学概論　渡辺浩希
ヒンドゥー教概説　渡辺章悟
インド仏教史　伊吹　敦
中国仏教史　竹村牧男
日本仏教史　渡辺郁子
サンスクリット文献講読　渡辺郁子
インド古典講読　渡辺章悟
インド哲学仏教学研究法A　竹村牧男
インド哲学仏教学研究法B　沼田一郎
インド古典哲学　森　章司
アビダルマ哲学　三澤勝己
日本思想史　伊吹　敦
東洋思想　渡辺郁子
哲学概論
卒業論文（制作）

〈相互乗り入れ科目〉

宗教社会学　大谷栄一
イスラム教概説　後藤　明

キリスト教概説　田渕文男
仏教漢文講読　橘川智昭
チベット文献講読　川崎信定
外国語文献講読　岩井昌悟
ヒンディー文献講読　宮本久義
パーリ文献講読　石上和敬
仏教梵語講読　岩井昌悟
インド文化論Ⅰ　沼田一郎
インド文化論Ⅱ　石川　寛
仏教思想論Ⅰ　渡辺章悟
仏教思想論Ⅱ　川崎信定
インド現代思想　宮本久義
ヨーガとその思想　馬場裕之
インド・仏教図像学（インド・チベット密教図像学入門）　島田茂樹
インド文学（インド伝奇物語『屍鬼二十五話』講読）　島田茂樹
仏教と社会（専任教員と外部講師のリレー連続講義）　森　章司
宗教学概論　川崎信定
仏教文化論（チベット仏教思想と実践入門）　高松薫直
浄土教の思想と文化　本田静芳
禅の思想と文化　伊吹　敦
法華経の思想と文化　金子芳夫
密教の思想と文化　真柴弘宗
華厳経の思想と文化　佐藤　厚
インド哲学仏教学演習①（古代インドの社会と文化）　沼田一郎
インド哲学仏教学演習②（インド思想の人間観）　菅沼　晃
インド哲学仏教学演習③（大乗仏教の研究）　渡辺章悟
インド哲学仏教学演習④（原始仏教研究）　森　章司
インド哲学仏教学演習⑤（禅思想研究）　伊吹　敦
インド哲学仏教学演習⑥（日本における諸仏諸尊信仰の形成と理論）　竹村牧男
インド哲学仏教学演習⑦（唯識・中観思想研究）　川崎信定

＜大学院＞

博士前期課程

サンスクリット文献研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（古典サンスクリット文法における時制と法（lakāra）の研究　菅沼　晃
サンスクリット文献研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ（仏教梵語仏典を読む）　渡辺章悟
初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵による釈尊教団形成過程の研究）　森　章司
初期仏教研究Ⅱ　森　祖道
大乗仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅱ　川崎信定
大乗仏教研究Ⅲ（『瑜伽師地論』を読む）　横山紘一
中国仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅳ（中国仏教研究）　伊吹　敦

日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（『華厳法界義鏡』講読）　竹村牧男

博士後期課程

インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（インド哲学・仏教学の諸問題）　菅沼　晃

インド哲学特殊研究Ⅲ・インド哲学研究指導Ⅲ（大乗仏教の起源）　渡辺章悟

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵の比較研究）　森　章司

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ（仏教と他派との思想交流）　川崎信定

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ（日本唯識思想研究）　竹村牧男

平成十六年度卒業論文

〈Ⅰ部〉

小島　尚枝　曹洞宗における葬儀の意義～変化する現代葬儀～

松嶋　智司　ヒンドゥー教における地獄思想

延島　広俊　何故妙好人が宣伝されたか。～明治の時代背景と明治期の妙好人伝群を中心に据えて～

鈴木　貫太　明恵の修行大系と仏光観

佐古　弘純　日蓮について

力武加耶子　『Devīmāhātmya』における女神 Cāmuṇḍā について

勝俣　舞子　現代における生と死の問題の仏教的アプローチ

小林由加子　古代インドにおける頭髪の美容学―文学作品における美と頭髪―

丸山　真歩　一遍聖絵からみる一遍

栗原　正和　ジャータカ（jātaka）における捨身供養について

中北　恭子　叡尊の戒律復興活動と非人救済の思想

貴貫　智裕　『中論』における prapañca の考察

安田　卓史　原始仏教に於ける無我説の学説整理

戸枝　弘朗　『秘密集会タントラ』の位置付け

植野百合子　インドの占星術について

池町麻依子　十牛図を読む

桐田　丈弘　『ヨーガ・スートラ』における「ヨーガ」について
左治木淳子　Ayurveda とそのいやし
十河　尚平　リグ・ヴェータ・サンヒター期から古ウパニシャット期までにおけるブラフマンとアートマンが梵我一如思想にいたるまでの思想展開
佐々木加代　アーユルヴェーダの健康観
木村乃梨子　インド・日本におけるマーリーチー
佐藤　大輔　ヒンドゥー教 śākta 派の宗教儀礼について ～pūrṇābhiṣeka
古村　朋子　戦争の中の仏教及び近代日本と禅宗のつながり
廣瀬　隆行　アンベードカルの思想遍歴 ―仏教改宗の経緯について―
広田　南実　Buddhadeva Bose The Book of YUDHISTHEIR 和訳
堀内　藍子　「スールヤシッダーンタ」第12章「bhūgola」翻訳
古澤　朋宜　インド音楽とジャズの類似性について ～歴史的背景と即興演奏を中心に～
吉田恵理子　インド音楽と西洋音楽の宗教的発展にみられる違いと比較
中村　和代　一遍の名号観
相澤　有紀　ミーラーン・バーイーの詩とバクティ―Alston.A.J.. The Devotional Poems of Mīrābāī 翻訳―
惠良　尚志　『ウパデーシャ・サーハスリー』の経験論理転換 ―現象学を手段として
高橋　淳　『中辺分別論』における障害の考察
プラジェート　飲酒戒教化ＶＣＤ５部作「飲酒本生物語」、「瓶本生物語（スラー酒の起源）」、「糞喰蟲本生物語」、「賢瓶本生物語」、「大金持ちの息子」作成のための基礎研究
プラスネット　タイ仏教から見た沙門の果報― 『沙門果経（Sāmaññaphala-sutta）』の考察を通して―
武内賢一郎　『正法眼蔵』「生死巻」解釈
小林佳代子　『教行信証』における「行巻」について
森田　大輔　サーンキヤ哲学における人生観
植松　志保　シュラウタ祭式の概説とダルシャ・プールナマーサの供物の準備の仕方
北山　幸枝　古代インドの犯罪と刑罰 ～『カウティリヤ実利論』kaṇṭaka śodhanam を中心に～
スフグジルト　モンゴル仏教におけるオンドル・ゲゲーン
オーダム　モンゴル版『ガンジュール』における般若経の編集と総括
鈴木　和陽　諷誦章を中心とした日什教学
平野　樹哉　インド「運命の神々」運命説話と民衆意識
江村　周　インド古代の自然哲学

＜Ⅱ部＞

須田雄一郎　インドの細密画―ラージャプートの絵画について―
加賀谷昌子　Āyurveda における治り難い慢性の皮膚病について―『Toḍarānanda āyurveda saukhyaṃ series7. 5章 6章』より―
小田島久美　古代インド思想における苦の観念 ―古代インドの苦観が Palliative care に及ぼす影響の可能性を探る―
岡田　綾　死に纏わる看護の考察―看護師の言葉から聞こえてくること―
名劔　研二　禅の悟りについて
細川　みき　タゴールの教育思想と理想教育
青木　宏治　ベンガル地方のバウルの歌
柴田　裕代　14世紀カシミール女性詩人ラッラーについて
吉田　幸司　大正新修大蔵経・阿含部・天の偈と悪魔の偈資料集
長谷川健太　インディアニズムを形成する食の原理
大内　武　ガンディーの非暴力思想の研究
山岸　真智　仏伝諸経典における数字の変遷
阿部江里子　シャンカラの哲学からよみとられるもの

大学院修士論文

菅野　馨子　清沢満之の有限無限論
赤坂　史人　如来蔵思想上における『宝積経・迦葉品』の研究
鎌田　美幸　『僧尼令』と仏教の戒律
曽　清満　原始仏教における禅観の研究
小嶋　孝　法蔵の『華厳経』「性起品」に対する解釈について

東洋学論叢　第30号
（東洋大学文学部紀要　印度哲学科篇　第58集）
平成十七年三月三十日　印　刷
平成十七年三月三十日　発　行　［非売品］
発行所　東　洋　大　学　文　学　部
東京都文京区白山五―二八―二〇
電　話　インド哲学科（三九四五）七三五七
印　刷　ヨ　シ　ダ　印　刷　株　式　会　社
東京都墨田区亀沢三―二〇―一四
電　話　〇三―三六二六―一三〇一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters
Toyo University
NO. 58
March, 2005
Series of
INDIAN PHILOSOPHY
XXX

CONTENTS

SUGANUMA, Akira : Some Talks on Toyo University and my studies of Buddhism, Indian Philosophy and Sanskrit ..... (20)

TAKEMURA, Makio : Dogen's Logical Comprehension of Human Exsitence ..... (39)

HASHIMOTO, Taigen : A japanese Translation of *Kaharā* in the Kabīr's Bījak ..... (97)

NUMATA, Ichiro : *Manusmṛti* Ⅷ, Ⅸ and Rājadharma Section (2) ..... (105)

IBUKI, Atsushi : The Various Activities of Huike's Successors Reflected in *Xugaosengzhuan*, and the Transition of Daoxuan's Knowledge ..... (136)

WATANABE, Shogo : How were Buddhist scriptures translated into Chinese? — Over the Vajracchedikā Prajñāpāramitā translated by Dharmagupta ..... (157)

MORI, Shoji : On Transimigration : Re-examination of *Avyākata*, *Paṭiccasamuppāda* and *Anattan* ..... (180)

Published by
TOYO UNIVERSITY
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo